

めいた声が零れてしまった。

「…何かあるのか？」

「いえ、特に何かがあるという訳ではないんですけど…」

それでも、こんな子どもっぽい理由で一緒に帰って欲しいとは中々言い辛い。

「あ、じゃあ私もお手伝いします」

良い事を思いついたとばかりに、そう提案すると文若は首を横に振った。

「そんな事を言つて、お前も最近遅くまで仕事ばかりしているじゃないか。休める時にきちんと休んでおかないと、その…いざと言う時に困る事になるぞ」

「…それはそうなんですけど」

文若の言う「いざ」の意味はよく分からないけれども、今はとにかく一人になりたくなかったのだった。

何しろ、現代日本に慣れ親しんだ花にとつて、この国の夜はとて闇が深く、また一層暗く感じる。スイッチ一つで、すぐに灯りが点く花の世界とは大違いだ。それだけに、その暗闇に何か潜んでいてもおかしくない怖さがあるのだ。

この怖さは、きつとこの人には理解されないだろう。それだけに、文若にその理由を言うのが躊躇われる。

「…お前との約束を違えなければならなくなるが、それでも構わないのか？」

「え？」

約束というのは、婚儀を挙げる前にした『出来るだけ家には仕事を持ち帰らない』と約束したその事だろうか。

「えつと、それは文若さんの体調を考えて言った事なので、文若さんさえ大丈夫なら良いんですけど…」

でも、急にどうして？

そう思つて夫の顔を見ると、文若はいつにもまして眉間に皺を寄せていた。

「…文若さん？」

「私はお前のなんだ？」

「え？」

「お前の様子がいつもと違うことくらい、私にだって分かる」

「…あ」

それでは文若は花を心配して、でも仕事を放り出すことも出来ないで、仕方なく仕事を家に持ち帰ろうとそう言う事なのだろうか。

「どうしても明日の朝議に間に合わせなければならぬ案件が一つある。それは家でやってもさほど問題はない」